

# 中国のカトリック教会

その過去と現在

金 魯 賢

今から6年前、我々は有名な天文学者でまた宣教師であったヨハム・アダム・シャル（1592-1666）の400回目の誕生記念日を祝いました。このイエズス会の祭司はケルンに生まれ北京で死に、その一生を中国への福音宣教と、東西の間の文化交流に尽くしました。私は今日彼の故郷で皆様と話すことが出来て幸いに思い、中国人民そして中国カトリックからのドイツの皆様、そしてドイツ教会にご挨拶をいたします。

400年前、中国人が最初に中国にやって来た、赤い髪、青い目、そして大きな鼻のヨーロッパ人に目を向けた時、彼らは大変に驚きました。ドイツ人はその時、彼らにしてみれば中国人を発見し、全く違った姿で、新しく奇妙な習慣を持ち、全く広大で未知の土地に住んでいるのに驚いたのであります。その当時は中国は彼らにとってみれば遠く離れた地でありました。皆さんはアダム・シャルが家に手紙を送った時に、その返事を受け取るまでに彼が3年待ったことをご存じですか？それはただ、輸送の手段が帆かけ船であったがために、目的地につくのにアフリカを迂回しなければならなかったからなのです。中国の文化はこのドイツの人々に一方ではまことに魅力的に、そして他方では外国の謎に満ちたものとして目に映ったことと思います。両者の習慣はあまりにも違っていたので、彼らはしばしば異なった惑星に住んでいる者のようにお互いを見つめたということです。

科学技術の発展のおかげで、我々の世界は以前よりも小さくなりました。ケルンから北京までの旅は、現在では飛行機で12時間から5時間になりました。

あるいは、ある人が家において受話器を取り、地球の反対側にある上海の友人に電話をかけることができます。しかし疑問は起こります。我々2つの民族は本当にお互いを知っているのでしょうか。現在の技術の進歩は本当に我々お互いを近付けたのでしょうか。

我々は今、宇宙時代を生きています。我々は月の写真を取り、はるか火星からの写真を研究することができます。それにも関わらず、我々の星における個人と民族の間のコミュニケーションはしばしば悲しいことに失われています。我々の情報はしばしば誤りであり、このことが偏見を生み、我々の知識に多くの溝を生みます。このことは、中国のカトリック教会に関しても、正しいと言えます。正しくない報道がしばしば広まります。情報は事実より誇張され、歪められます。時々、私個人についてあるいは仕事についての偽の情報が広まります。私が今日ここに来、皆様にお話しをする理由の一つは、そうした間違っただ理解に打ち勝つために我々を援助していただきたいということにあります。我々はお互いに親愛と真実をもって語ることを学ばなければならないのです。

我々についてのあまり良くない報告がありますが、また評価すべき多くの報告もあります。多くのドイツの皆様は、中国を訪問することについて、また偏見なく語り聞くことをこだわりなく考えられているのは、我々についてより多くの客観的な理解を得られているためであると思います。

私のこの旅が可能になったのは、ドイツの同胞の親しいお招きをいただいたからです。私はこの招待を大変嬉しく、感謝いたします。私はまた、この場所にお招きくださり、講演の機会を与えてくださったことを感謝致します。このお互いの経験の相互の交換によって我々は我々自身と我々の民族の間の友情の促進がなされることを願います。私は、我々がここで語りまたなすことが、全能なる神の祝福のもとにあるように望みかつ祈ります。

今夕の講演に示されているいくつかのトピックスの中から、「中国から見た世界教会と地方教会」そして「極東におけるキリスト者の信仰：中国の見解」に絞りたいと思います。この両者ともに大きな課題であり、私の限られた知識でこれらについて時間内に語ることに恐れを抱いています。私はこの両者につ

いて私よりも多くを知っておられる方がこの中にも多くいらっしゃると思います。ですから、これからお話ししようと思いますのは、中国のキリスト者の過去と現在に於けるまったく私の個人的な経験であります。

## 中国に於けるカトリック教会の歴史

最初に歴史について短く述べたいと思います。

唐時代、7世紀の始めに、ボニファティウスがドイツで彼の仕事に着手する以前、中国の帝国のルネッサンスの間、キリスト教はすでに中国に入っていました。それはシルクロードをつたって我々の国に旅をしていたネストレ派のキリスト者でした。彼らは教会をたて、中国人のなかから多くの信者を見いだしました。この最初のキリスト者の宣教の時代は200年程続きました。やがて全ての外国宗教は、皇帝の法令に驚きました。そしてネストレ派の人々は中国から永遠に消滅しました。13世紀の始めにジンギスカンの孫であるフビライハン（1260-1368）をひらき、北京を首都としました。これらのモンゴル人は、全ての宗教に対して開放政策をとり、また非常に寛容でありました。結果としてフランシスコ会の宣教師達はヨーロッパから中国に入ることを許可されました。彼らもまたシルクロードを旅し、教会をたて、キリスト者の共同体をつくりました。1298年にイタリアのフランシスコ会のショバンニ・デ・モンテコルビノ（1247-1328）とドイツのケルンのフランシスコ会のアーノルドは北京の司教管区をつくりました。彼らは中国で特に貴族階級に多くの信者を見いだしました。カトリック教会は大きくなり、揚州（江蘇地方）、広州（福建地方）など、多くの他の場所に教会がたちました。キリスト者は、特別な特権をも得ていました。しかしフランシスコ会が成功したのは、主としてモンゴル人に於てであって、本当の中国人である漢の人々にはこの時代に福音の知識は伝わりませんでした。その結果として元が1368年に1644年まで続いた中国王朝の明によって倒された時に、中国に於けるキリスト者は二度目の崩壊を経験しました。

中国のキリスト教の運命が再び変わったのは、明朝の終わり、マテオ・リッチとミカエル・ルギエリが広州の南の地方の紹平に植民することができた時代

でありました。

マテオ・リッチ（1552-1610）は皆さんも良くご存じであると思います。彼が中国に来てから400年の記念が4年前に西と東において祝われました。世界中でこの時彼の名譽をたたえて、多くの文書と講演が持たれました。リッチは全ての宣教師の模範として称賛されました。というのも、彼はすでに福音の適応に重要な理解を示していたからでした。リッチ彼自身はその人生を通して実践したことが、まさにそうしたポリシーでした。どのようにして我々は今日の状況に於て彼に見習うことが出来るのでありましょうか。

アジアの使徒の熱心な要望があり、フランシス・ザビエル（1506-1522）は中国のキリスト教の扉を開きました。彼は見捨てられ、孤独で、中国大陸の南の海岸を望む小さな島で死にました。神の道はなんと不思議なのでありましょうか。ザビエルの死の年に彼の死の願いが託され、マテオ・リッチが生まれました。ローマにおいて彼が哲学と神学だけではなく天文学も学び終えた後、リッチは宣教活動のためにポルトガル政府から許可を得るためにリスボンに行き、マカオに船出しました。数年ここで準備をした後、彼は最後に中国国内に入ることができました。

この時代の宣教はノンクリスチャンの文化に覆われていました。それは3千年の歴史をもつ、高度な道徳性という特徴をもった文化です。この文化の高慢な高さから彼らはヨーロッパ人を見下ろしましたが、このことはマテオ・リッチについて言われるべきではありません。到着してすぐ、彼は情熱と愛とを言葉でマスターするために費やし、彼自身中国文学と中国の習慣を学ぶことに没頭しました。彼は適応の開拓の道に続き、多くの反響と経験の後、彼は実践的で現実的な福音化の方法に辿り着きました。この時、彼は中国人の多くの階層によってのみならず、中国社会のエリートからも受け入れられました。

リッチは大変特別な中国人の2つの特徴に注目しました。第一は、大変有名な哲学者の孔子に深い尊敬を抱いていること、そして第二には、両親と先祖——家族の先祖に対してはほとんど子供のような愛情と尊敬を抱いているということです。彼らの祖先を記念する式典なしには、何のお祭りも祝われない

のです。例えば、彼らの写真や記念の牌の前に食物を捧げます。Ricciは孔子の文化に完全に適応しました。彼は中国の哲学者の服装を着、彼の説教と文書に、しばしば彼は中国の古典を引用し、彼のメッセージはいわば、中国服を着ていたと言えるでしょう。彼は次のように書いています。「このようにして福音は中国人に、より理解しやすくなった。」

このようにリッチは、多くの中国の哲学者達の深い尊敬と友情とを勝ち得、その友情を通して多くの人々がキリスト教信仰を理解し受容するに至りました。これらの哲学者の中には、多くの宮廷の高官らがおりましたが、たとえば李啟超（c. 1630）そして徐光啟（1562-1663）は後に元首となりました。こうした関係によって、リッチは帝国宮廷内部に入り込むことが出来、彼は皇帝自身との接見を許されました。リッチは最新の西洋科学の発展を中国に紹介しました。多くの中国人が、彼の広い学習と深い知識とに尊敬するに至りました。キリスト教が中国で残り、根をおろして発展することが出来たのは、このような文化との融合を通してであります。

この時代の静けさは、リッチのアプローチの正確さを表しています。1584年には3人、1585年には19人のみのキリスト者がいるだけでしたが、1589年には80人に増え、1603年までには500人、1610年には2,500人を越え、1636年には38,000人になり、1648年には48,480人、1670年までにはすでに273,780人の中国人カトリックキリスト者がいました。しかし、このような発展は長くは続きませんでした。悪魔は既に主のぶどう園に不一致の種を蒔いていたのです。

当時のドミニコ会とイエズス会は強力な敵となって、広い範囲の重要な問題に関してその見解を衝突させていました。彼らの論争はヨーロッパ、特にローマにおいて集中し、中国にも流れ出していきました。このことに加えて、ポルトガルとその他の植民地勢力の間の政治的拮抗が起りました。ポルトガルは東に到着した最初の植民地勢力であり、インドとインド洋に隣接する全ての国々に要求をした国でした。こうして、教皇パドロードからこれらの場所の宣教の権利を得、教皇アレキサンダー4世（1492-1503）によるローマ教皇の教書は、東インドの全ての国々を含むポルトガルの植民地の拡大を奨励しました。

植民地勢力は、東アジアにも到達し、特にフランスはそこでの保護領の宣教の権利のためにポルトガルと激しい競争をしましたが、そこには彼らの植民地政策を広めるために、宗教と宣教とを利用したヨーロッパ勢力の政策がありました。

我々は今、礼典論争に少々言及したいと思います。孔子と祖先とを崇拝することは、中国全体の共通した習慣です。イエズス会はそれを単なる自然な民間の儀式としか考えませんでした。そのために、キリスト者の参加を自由にしました。しかしドミニコ会とその他の、特にフランスの宣教師達は、祖先崇拝を特別な習慣とみなし、それゆえにすべてのキリスト者に禁じました。彼らは原則的に中国の文化を拒絶しただけではなく、彼らは中国名から西洋の名前に姓を変えたのです。その後彼らに何が起こったのでしょうか？植民地主義者と彼らを援助する人々の見たものは、ただ彼ら自身の興味のあるものだけであり、教会の安定には何も寄与しなかったのです。

皇帝康熙（1655－1723）は賢く心開かれた人でした。彼もまたキリスト教には友好的で、その長所に高い尊敬をはらい、アダミ・シャルやヴァービーストといった初期の宣教師に学びました。彼は福音に見いだされる、特にキリスト者の愛に関連する教えに感服しました。宣教師達の中で口論や論争が起こると、彼の好意的な印象は幻滅に変わりました。彼はみかけの外の長所の背後にある利己的な陰謀と貪欲の力とを考え始めました。イエズス会の親しさのうちに彼は礼典に関する議論に終止符をうちたいと望み、それゆえに彼は公に孔子崇拝と祖先礼拝は民間の儀式であることを宣言しました。この皇帝の声明にも関わらず、ドミニコ会とその同胞は彼らの攻撃を放棄することをせず、この論争を一層刺激をしました。

教皇クレメント11世（1700－1721）は、アンテオケの元老であり、教皇代理使節として中国に教皇の中国の典礼禁令の公布とその効果の視察のために来たシャルル・トーマ・マーシャル・ド・トゥルノン（1668－1710）を送りました。彼は北京に最も強力な反対者である司教代理のシャルル・メグロ〔パリ宣教会〕（1652－1730）を呼びだし、皇帝に接見しました。皇帝がその王座の後ろに吊

してある4つの大きな文字を指して、メグロにもしこれらの意味を理解するならば、翻訳するように尋ねましたが、彼はできませんと答えました。その時に皇帝は彼にこのように言いました。「あなたは中国の言葉を話すことができな  
いばかりか、書かれた時にもわからない。それではあなたがたは、どのようにして中国の問題について判断することができるのだろうか？あなたは中で何が起きているのかを論評する部屋の外に立っており、その扉は閉じられている。あなたの話しは何の根拠もない。中国から出て行け！」トゥルノン  
はマカオに戻らされ、ポルトガル王の許可なしに、中国の大司教を任命しようと試みるために彼を監禁しました。

トゥルノンの死後、クレメント9世は中国にもう一人の教皇使節を送りました。カルロ・アンブロジオ・メッサバルバは禁令を施行するために、教皇教書であるエクス・イラ・ディエを携えてやって来ました。彼もまた中国儀礼のために皇帝に接見しました。接見の時に皇帝は彼に西洋の宗教美術に描かれている、翼をもったヨーロッパの人間がいるのかどうかを尋ねました。メッサバルバは答えました。「いいえ。翼をもった人間などヨーロッパにはいません。画家が単に、天使の素早いことをそうした方法で象徴的に表現したのです。」皇帝は言い返しました。「わかりました。というのは、私達中国人は、あなたがたの言葉を良く知らないの  
で、我々はあなたがたを理解することが出来ないのです。しかしあなたがた西洋人は我々中国の言葉を話すことができません。ですからどのようにして中国の問題について決定をすることができるのでしょうか？これが私がこの私の質問によって伝えようとしたことなのです。」

皇帝の声明が繰り返されたにも関わらず、教皇は依然として強硬であり、破門の脅迫のもとに祖先崇拝を中国のカトリックから禁止しました。皇帝が、宣教師たちは繰り返し教皇の支配を実行していることを学び、彼らを中国から通報しました。

この時、中国のカトリックは彼ら自身の困難な状況に気づいたことは、だれにでもすぐに想像できます。禁令を守ろうとするカトリックは、キリスト者を残すためにもはや例外なく孔子崇拝と祖先崇拝とを行なっている中国人のこと

を考えなければならなくなりました。カトリックの子供達は、伝統的な教えが孔子の教えであるために、正式に中国の教育を放棄しなければなりませんでした。中国のカトリックは今や彼ら自身の社会から追放され、彼ら自身の民族から退けものになっていったのです。

この粗野な教皇の干渉の結果、中国のキリスト教は衰退しました。30万人を越えた中国のカトリックは禁令の後すぐに20万人を下回り、残されたカトリックはほとんどが農夫や漁師達で、彼らは孤立して住んでおり、中国社会からは蔑まれていた人々でした。

200年後に、ローマは遂に禁令を解除しました。今日の中国では孔子と祖先崇拝とは奨励されています。台湾の多くの教会では、孔子の絵が聖トマスと並んで置かれています。諸聖徒の日にキリスト者は墓地に行き、墓の前に彼らの好む食物をそなえます。こうした変化は確かに良いものだと言えます。誤りに固執するよりも、間違いを認めることのほうが良いことであります。しかし、なぜ彼らはこうも遅れたのでしょうか？孔子崇拝が中国には必要であった時代に、ローマはそれを禁じました。そして中国が彼に全くの無関心となった今、ローマはそれを許しました。儀式の論争によって引き起こされた損害は、いまだに元通りに直すことが出来ません。人がその間違いに気づくのは良いのですが、もしその結果を考えるならば、将来同じ間違いを繰り返さないでしょう。私の私見によれば、重要な理由は、教会が権利をめぐるつまづき、教会と植民地勢力の間の不信心な同盟に疑問が生じたことであると思います。彼らはキリストの愛の教えと全ての人に等しい権利があるという教えを忘れたのであります。彼らは外国をキリスト教化したかったのであります。彼らのしたことは、その植民地化であります。

中国の門は1842年に所謂「不平等条約」によって、キリスト教の宣教師達に再び開かれました。それは第一阿片戦争が終結し、勝者の英国が皇帝に署名させたものであります。「今から外国の商人達は中国全土で阿片を売ることを許可し…宣教師達は帝国全体に福音を広げることを認める。」恐らく、キリスト教の信者達が力をもって他国に阿片を強制することはキリスト教にとってまこ

## 紀 要 1

とに恥辱であります。キリスト教と共に、福音を語る自由はヨーロッパの権力によって、彼らの政治的影響力を拡大するために利用されたのであります。そして、ローマ教皇庁はそれらの権力と同盟し、彼らを中国の教会に割り当てました。

ポルトガルの衰退によって、フランスは所謂保護領を中国のカトリックの宣教師団から取りました。フランシスコ会の宣教師は、北京、天津、上海、河北、江蘇、江西、広東、雲南、浙江と言った都市を取りました。ベルギーの宣教師達はモンゴルを、ドイツは山東を与えられました。宣教師達は土地を買い、教会を建て、学校と病院を設立しました。多くの宣教師達は善良な人々で、彼らの一生を中国の教会に捧げました。しかし、そうでない人々もいました。ある例を語るなら、上海のカトリックのオーロラ大学の校長は好んで、「黎明、それはフランスだ！」と言っていました。

多くの中国人の目には、宣教師は国に対してほんの少ししか興味を示さないように見えました。キリスト教はそれゆえに西洋による西洋宗教であり、中国のものではありませんでした。それ以上に宣教師達は、多くの特権を与えられており、あるクリスチャンの人々は、宣教師達の助けによって彼らの隣人に対して不正な訴訟が許されていきました。このことは、宣教師達に向けられた多くの不満と憤りと怒りの源となり、それは1900年の義和団革命へと導かれていきました。その時の義和団達の戦いの叫びは、「清王朝を支持し敵を倒せ。(そこには外国の悪魔であるキリスト者が含まれていました)」ドイツを含む8つの外国勢力は力を合わせ、この革命の鎮圧のために中国に軍隊を送りました。北京の公使館が包囲された後、中国は非難され、同盟勢力は4億中国ドル(その当時の1ドルは一般労働者の半月の賃金でした)の賠償金が課せられました。外国の軍隊はついに撤退し、キリスト教は益々強大になっていきました。

さらに、中国カトリックによってその悲惨なことが証明された誤りは、バチカンによってその当時の日本侵略においてもなされました。バチカンは日本に操られていた満州の満州国を急いで調査しました。教皇の使節団の大司教 Zanin もまた、中国カトリックのすべての司教と司祭に手紙を書き送り、日本

の侵略について依然として中立であるように注意した。もっとも、この立場は中国の愛国者を深く傷つけた。日本とイタリアが、ファシスト政権であったドイツを軸にして連盟を形成しようとしていた時、中国人はバチカンに対して何を考えたのでしょうか？

マテオ・リッチの時代から350年たった中国の教会には、たった1人の中国人司教がいるのみでした。1926年に最初の中国人司教が任じられた時、全ての司教は外国人でした。もっとも、彼らには重要ではない教区が与えられていました。1930年代になると、バチカンの態度が変わり、第二次世界大戦後の1946年に、独立した中国の階級制度がつくられ、北京においてついに最初の中国人司教と枢機卿が置かれました。しかしそれはあまりにも遅すぎました。1949年に毛澤東が中国の実権を握ったのです。我々は、この権力の交代がすべてのヨーロッパ勢力の植民地的、帝国主義的要求の終わりを意味し、国を尊び全くの独立を中国に回復したことを意味する交代であったことを見逃すことができません。

この大変重要で微妙な状況の中で、中国のカトリックは新たな不運にみまわれました。ローマ教皇庁は、現在中国を支配した人民に受容されている共産党との協調を禁じました。カトリックは新聞、定期刊行物、共産党が出版する書籍を読むことを禁じました。彼らはまた共産党組織とは商業の連合やその他のどのような提携をも禁じました。中国人がアメリカの軍隊と戦っている間に、バチカンは揚州（江蘇地方）の司教にアメリカ人を登用しました。皆さんは、もし第一次世界大戦の時にケルンの大司教にフランス人が、またリールの司教にドイツ人が登用されるということを想像することができるのでしょうか？

このように、再び中国のカトリックは過去のディレンマを見ることになったのです。カトリックを残し、中国人を残すことができませんでした。外国の宣教師達が中国を追放された後、バチカンは新しい司教を置こうとはせずに、中国のカトリック自身が選択し任命するようになりました。選ばれた者の名前はローマ教皇に送られましたが、破門の脅迫が戻ってきたのです。

中国教会のこうした大まかな歴史によって、我々は3つのことを学ぶことが

できます。

- 1 教会は人々と文化とにその土台をすえなければならない。信仰は多くの人々に伝えられなければならない。教会は人々と運命を分かち合わなければならない。
- 2 文化に溶け込むことは、全ての牧会活動の基本とする第一の原則である。
- 3 教会は植民地勢力から独立し、地域の独立運動を実行しなければならない。

それぞれの地にある教会は独自の運命を担っています。中国の教会は独自の経験をしました。同時にローマ教皇庁が世界戦略を持ち、いつも単一ではない多くの異なった人々と権力の平衡を試みなければならないことは、良くわかります。我々中国カトリックは、カトリックであり続けることを望むカトリックです。我々はプロテスタントや正統正義のキリスト教になりたいとは思いません。我々は基本的に第一及び第二バチカン会議を受け入れ、第二バチカン会議の指導を中国において実行しようとしています。神の助けにより、我々が教会を管理発展させることができますように。我々は勇気と知恵をもち、また神がそのようになさることを祈ります。

## 世界教会と地域教会：中国のパーспекティヴ

さて私は第二の課題、中国からみた世界教会と地域教会について話そうと思います。

地域教会とは何であり、また世界教会とは何でありましょうか？それらの言葉の意味の解説の後に、議論を進めてまいりたいと思います。地域教会とは弾力性と柔軟性という概念です。それぞれのキリスト者の共同体は基本的に、地域教会と呼ぶことができます。教区は世界という視野においては地域教会です。地方、国家、大陸教会もまた地域教会です。ケルンは上州の地域教会です。ローマ教区もまた、イタリア教会、アジアの教会、ヨーロッパの教会そしてスラブ教会と同様に地域教会です。

世界教会はむしろどこにも存在しないような抽象的なものです。それは地域教会の中においてのみ存在します。たぶん「普遍的教会」のかわりに「完全な

教会」あるいは全体教会と言ったほうが良いかも知れません。全体教会はそれぞれの地域教会に存在し、それぞれの地域教会は完全な教会なのです。「主は一人、信仰は一つ、洗礼は一つ、すべてのものの父である神唯一であって、すべてのものの上であり、すべてのものを通して働き、すべてのものの内におられます。」(エペソ4：5－6)

教会はサクラメントです。それは神とのもっとも親しい合一でありまた全ての人類が一つになることでもあります。これは背後に神の神秘的な働きという秘義が含まれています。

地上にある教会の相違、一つであること、同一性は天にある三位一体を反映しています。このことは、地域教会の間関係において、我々が相互の愛と交わりと共同体とが重要であり、力と法とは重要ではないということに気づかなければならない理由であります。愛をもって前進し、福音を述べ伝えることから宣教のわざが始まるのです。地域教会を設立した後に、彼らはその背後に退かなければなりません。何百年にもわたってその指導的な立場にいつづけることはできません。彼らは洗礼者ヨハネの「私よりも優れた方がこられる」という言葉を自らのものとしなければならない。

我々の教会は、新しい神の民であります。キリストに土台を置き、全ての人に救いを述べ伝えます。それゆえに、教会は全ての人と国とに開かれています。教会は天のエルサレムへの巡礼者です。教会が新たな国において福音を宣べ伝える時、教会はその文化と自分自身とを結び付けます。

教会がユダヤ教やオリエント世界から出てきました。それは教会がその始めにおいて多くのオリエント的な特徴を持っていたことの理由です。教会は西洋において発展しました。ヘレニズム、ラテン、福音そしてユダヤ教という全ての要因は西洋のキリスト教の中にあります。ヘレニズムとラテンは非常に密接に結び合わされ、現在ではもはや区別することが困難です。

初代教会は文化に溶け込むこと目立った例であります。後にラテンの要素が支配しました。こうした教会の成立は重要であります。法と権力が強調されました。こうした教会の制度化は必要でありました。しかし、交わりや友愛は

取り除かれてはなりません。今日我々は、新しい文化のなかで教会が文化と溶け込み、一体となるという課題に直面しています。他の文化との統一は、教会をより豊かに美しくします。それは我々の教会の活力であり、単調であるとか「一色化」は停滞であり弱さであります。キリスト教は多様性によって破壊されないのであり、むしろこのことによって完成されるのであります。すべての国民の様々な文化はキリスト教の豊かさの一部なのです。

キリスト教はラテン文化あるいはヨーロッパ文化を意味するものではありません。今日の教会は、その完成に向かって成長し続けています。教会は、インドや中国のような他の文化の多くの栄養を必要としています。文化と溶け込むこと、文化を変容させること、文化の交流等はキリスト教化の過程に起こる出来事です。様々な様相をもった異なった人々の行列は、単一の行列よりも興味深いのです。

最近私はリヨンの大司教である枢機卿アルベール・ディクートレーの本を読みました。そこに大変示唆的であるものを見いだしましたので、引用いたします。

多くの人々は、信仰は純粹で理想的であると考えています。それは何千年にもわたって変わることのなかった考えです。しかし、現実にキリスト教信仰は地域教会との一体化によってのみ発展することができました。聖書における神の言葉は、一つの国の文化における人間の言葉で示されました。

神の子ロゴスの信仰は本質的に何かが変わえられることなしには、異なった文化、違う文明においてそれ自身経験し、生き、また表現することはできないのです。我々は、さらにこのように言うことができます。神の言葉がその無限の力を展開するのは、多様性の中で、また異なった機会と場所においてであります。

「神の言葉が人類の歴史に入った時以来、善と美はこの世に限りなく現されました。キリストは彼の弟子達に、聖霊の力によって「あなたがたは私よりも大きなことをなす」と言われました。それは、教会が、新しい文化、新たな政治状況、新たな挑戦に対して対決する時に、死に対して助けがなくまた恐れて

いるわけでもないということの理由なのです。教会の姿勢は、それゆえに否定的なのではなくて、一致を求めるものです。まさに、教会は真理と光と永遠の命を所有しており、確信と楽観主義とに満たされているのです。」

教会は神秘的なキリストの体です。教会は時間と空間の中で成長し、この次元は神によって教会のためにあらかじめ定められていました。全ての国の文化の真髄は神からきており、またキリストのからだを形づくる一部として、神によってあらかじめ知られていました。個々の拒絶は、取り替えることができない損失を起こします。パウロはこのように言っています。「体は一つでも、多くの部分からなり、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である……一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。」(第一コリント12:12-26)

地域教会同士の関係は、コイノニア、コミュニオンそして相互の愛、尊敬、援助でなければなりません。露骨な干渉や他の教会を圧迫するようなことがあってはなりません。

私見によれば、宮殿に住む教会の王達は、食べものも着るものもないスラムに住む人々の痛みと惨めさを知ることができません。全ての聖職者と修道女達、そしてすべてのクリスチャン達はこの悲惨を見つめ、彼らを助けなければなりません。それゆえに、これ以上干渉しあってはならないのです！

中国では300万のカトリック信者がいるのみで、大変小さな小数派です。しかし我々は再び牧会の職務につくことができます。我々は格闘し、そして我々は成功します。我々は、兄弟でありまた友であるすべてのカトリックの人々との交わりを持ち、われわれの苦しみと喜びを共に分かち合いたいと願っています。

私は歴史家でもなく神学者でもありません。ただ皆さんと、私の経験のいくつかについて分かち合ったにすぎません。ご静聴ありがとうございました。

(『金陵神学誌』1987年9月、平田 誠訳)